氏　　名	：	高松　美紀
専攻分野の名称	：	博士（教育学）
学 位 記 番 号	：	博甲第 225 号
学位授与年月日	：	平成２６年３月１４日
学位授与の要件	：	学位規則第４条第１項該当　課程博士
学 位 論 文 名	：	定時制高校における外国人生徒支援に関する研究 ―「取り出し指導」の分析を通してみた課題と可能性―
論文審査委員	：	（主査）　教授　松井　智子 （副査）　教授　新倉　涼子　　教授　坂西　友秀 教授　加藤　清方　　教授　川﨑　誠司

学 位 論 文 要 旨

本論文は、定時制高校における外国人生徒に対して、どのような学習支援のあり方が有効かを検討することを研究の目的とするものである。本研究の意義は、定時制高校における学習支援の制度導入後の実態と問題点を明らかにした上で、生徒の学習支援のニーズを「摺り合わせのプロセス」という観点から検討し、新たな学習支援の可能性を提示した点である。また、「取り出し指導」を中心に、学習支援の具体的な課題と改善点を示し、新たな学習支援の可能性として、定時制の特性をふまえて、具体的な事例から、外国人生徒が卒業後に生きていくために必要な支援を、「現実認識」に着目して具体的に示した点において、教育実践にも寄与しうる。

近年、日本語指導が必要な外国人生徒が、高校、特に定時制において著しく増加している。しかし、これまで外国人生徒の学習支援に関する研究は、高校段階では少なく、制度導入後の実態が十分に解明されていないことに加えて、学校側や研究者側の単一の視点から検討されたものが多かった。また、これまで生徒個々のニーズに応じた支援の重要性が指摘されながら、そのニーズをどのように探るのか、定時制高校の外国人生徒のニーズがどのようなものかは明らかにされてこなかった。本研究では、学習支援として「取り出し指導」を中心に、非常勤講師や生徒を含めた多角的な視点から実態を把握し、問題生成のメカニズムを検討するとともに、外国人生徒の学習ニーズや、学習支援の実践の分析を通して、新たな学習支援の可能性を検討した。

本論文は、序章（研究の目的）、本章（第１章～第４章）、終章（総合考察）から構成される。本章以下、各章の概要と知見を示す。

第１章では、先行研究を検討し、研究方法と調査概要を示した。先行研究からは、学習支援の実態を多角的にとらえること、生徒のニーズの把握の仕方を検討し、定時制高校の特徴と外国人生徒との相互作用を明らかにすること、生徒が卒業後に社会で生きることを視野に入れた学習支援の可能性を検討すること、を課題として示した。研究方法は、参与観察とインタビューを中心とした５つの質的調査による、仮説生成型の研究であることを示した。

第２章では、高校における外国人生徒支援の現状と、定時制の教育資源との関係を検討した。事例調査からは、定時制が学校としての規範的側面と同時に、一般の学校とは異なる柔軟な側面

を持ち、生徒はそれらを調整して教育資源として利用していること、定時制の社会的な位置づけを意識した上で各自がライフコースを探り、就学意義を持つことが明らかになった。こうした中で、外国人生徒は、定時制の教育資源を十分に認識し、活用できない場合や、自己決定のための現実認識が難しくなる場合があることがうかがえた。

第３章では、「取り出し指導」に焦点を当て、３つの調査から制度導入後の学習支援の課題を検討した。第一に、都立高校を対象にした調査の結果、「状況依存」、「講師依存」の傾向、講師を交えた対話がないことに加えて、生徒のニーズや視点が考慮されないこと、講師が必要な仕事をシャドウ・ワークとして負わざるを得ない一方で、同僚性から疎外されている実態が明らかになった。第二に、外国人生徒が急増した高校での事例調査の結果、学校が外国人生徒教育に対して明確な方針を持たないこと、非常勤講師が定時制の多様な外国人生徒への対応が困難なこと、生徒が自分自身の学習ニーズを明確にできないこと、などの要因が相互に作用して、支援が効果的に働かないことが明らかになった。第三に、講師に焦点を当てた調査の結果、「同僚性」の阻害要因として、相互不干渉という教員文化、非常勤講師という雇用上の制限に加えて、「取り出し指導」の専門性のとらえ方が影響すること、また、個々の講師が実践的知識を得ながら共有しない傾向が明らかになった。

第４章では、生徒のニーズを探り、卒業後の将来を視野に入れた新たな支援の可能性を検討した。生徒一人に焦点を当てた縦断的調査からは、生徒の就学意義や学習意義が、自己向上感や将来の「めど」と関連しており、そのつながりが見えず、習得段階のみ示されるような日本語支援に対しては有用性を感じないことが明らかになった。さらに、生徒に現実認識をうながした日本語の授業実践と、教科の授業実践を改めて分析した結果、教員が生徒の文脈を考慮して、生徒のニーズと生徒に必要だと判断して行ったニーズの「摺り合わせ」を行ったことや、生徒の問題を一般化して、進路指導や生活指導ではなく学習支援として行ったことに、支援の有効性と可能性がうかがえた。

終章では、知見からの提言として、外国人生徒の学習支援のニーズは、双方向的に創出する必要性があること、既存の「取り出し指導」の制度や「日本語指導」のとらえ方では限界があり、別科目として設定するなど柔軟な制度的措置の必要があることを指摘した。研究課題は、ニーズの「摺り合わせ」をする教員の力量形成、学習ニーズの判断と「摺り合わせ」の適切性を検討することである。